

現代日本語における希求文のテンポラリティ
—シテホシイ、シテホシカッター—

The Temporality of Optative Sentences in Modern Japanese
—Shitehoshii, Shitehoshikatta—

宮 城 星 留
MIYAGI, Seiryu

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第54号 2022年12月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.54 2022

現代日本語における希求文のテンポラリティ —シテホシイ、シテホシカッタ—

宮 城 星 留*

1 はじめに

現代日本語の希求文（まちのぞみ文）は、事態実現に対する話し手の欲求をモーダルな意味として表す文である（宮崎2020）。希求文はそのモーダルな意味において平叙文や命令文、疑問文といった他の文タイプから区別されるが、それだけでなく、他の文タイプにはない文法上・意味上のさまざまな特徴もみられる。発話時現在における話し手の望みを表す過去形の用法がその一つとして挙げられている（奥田1986、宮崎2020）。(1) に対する (2) のような文である。

- (1) 「全て筋書き通りになったわけだ。でも、どうしてそんなことを？ 俺を南極に呼んでなにをさせるつもりだったんだ」「君の手で、篠田英治の隕石を見つけてほしかった」(PB59_00677)
- (2) 「東条首相がピストルで自殺未遂だっていうじゃないの。軍人らしく立派に切腹して死んでほしかったわねえ」(LBq9_00134)

(1) は事態実現に対する望みが過去に成立・存在したことの確認を表す文である。それに対し、(2) は事態成立に対する話し手の発話時現在の望みを意志表示として表す文である。シテホシカッタという過去形は、(1) においては望みの存在時が〈過去〉であることの認識を表すのに用いられているため、〈発話時現在〉の望みに対する認識を表すシテホシイとテンス対立をなす。一方で、(2) においては、シテホシカッタはそれのとり事態が〈反リアル〉であることを表すのに用いられているため、〈ポテンシャル〉な事態への望みを表すシテホシイとリアリティの点で対立すると考えられる¹。

このような (1)、(2) に対して、以下に挙げる (3) のようなシテホシカッタは先行研究による扱いが不十分だった。

- (3) 「あのう、すみません。知らない間にとってしまったというか……申し訳ありません」
華が頭を下げ、腕時計を差し出すと、和一が笑って言った。

* 岡山大学大学院 社会文化科学研究科 博士後期課程1年

¹ 本稿におけるリアリティの定義に関しては2. 2を参照。

「いいんだよ。それは君のものだ。もとはと言えば巖のものだからね。卒業式の日巖からもらった腕時計なんだ」

「だったら尚更受けとるわけにはいきません」

華は腕時計を前に出す。すると和一は腕時計を受けとり、それを左手の手首に巻きながら言った。

「若い子には古過ぎるか。あんたに持っておいてほしかったんだがね」(ルパンの娘 p.274)

本稿では、(3) のようなシテホシカッタをシテホシイ・シテホシカッタの意味体系に位置づけるために、〈希求の叙述〉を表すか〈希求の表出〉を表すかというムード的側面における区別を前提として、当該形式を次の3つの側面から分析する。テンス的意味の側面、リアリティの側面、および望みの成立時点における事態の実現可能性の有無という側面である。

このような観点からの用例分析を通して、本稿では、シテホシイ・シテホシカッタが〈希望の叙述〉を表す場合は〈現在〉—〈過去〉というテンス対立をなし、〈希望の表出〉を表す場合は〈ポテンシャル〉—〈反リアル〉というリアリティの対立をなすと主張する。また、(3) のようなシテホシカッタに関しては、〈過去における望みの成立・存在〉を表すものであるとし、望みの成立時点における事態の実現可能性の有無から (2) のようなものと区別できることを示す。

以下、2節ではシテホシカッタに関する先行研究の問題点を指摘したうえで、3節以下での分析に先立って、非動詞的述語に成立するテンス対立、過去形の表す反リアルというムード的意味について確認する。3節でシテホシイ・シテホシカッタのテンス対立、リアリティの対立について概要を述べ、4節ではシテホシイ・シテホシカッタにみられる構文論的・意味的特徴にふれつつ、シテホシカッタが〈過去〉を表す場合と〈反リアル〉を表す場合に分けて詳しく述べる。

2 先行研究

本節では希求文を構成するシタイ・シテホシイの過去形シタカッタ・シテホシカッタに関する先行研究の記述を整理し、従来の記述において明らかになっていない点を指摘する。それをふまえ、3節以下における意味記述の前提として、非動詞的述語にみられるテンス対立と、過去形のもつ反リアル用法について確認する。以下では、まずシタカッタ・シテホシカッタに関する先行研究の記述について検討する。

2. 1 シタカッタ・シテホシカッタの先行研究

奥田 (1986) 以来、仁田 (1991)、高梨 (2010) 等において、シタカッタ・シテホシカッタには前掲の (1)、(2) にみられるような2つの異なった意味が認められてきた。(1) のような〈過去に存在する、事態実現への望み (過去の希望)〉と、(2) のような〈話し手の発話時現在における望

み(反事実)」という2つの意味である。前者は〈過去〉を表し、後者は〈現在〉を表すため、両者はテンス的意味の面で区別される(奥田1986、高梨2010)。

しかし、全ての例が判然といずれかの意味に区別されるわけではなく、〈過去の希望〉〈反事実〉という2つの意味が接近し、どちらの意味を表すかが明確でない場合もみられるとされている。それが前掲の(3)のような例である。(4)に再掲する。

(4)「あのう、すみません。知らない間にとってしまったというか……申し訳ありません」

華が頭を下げた腕時計を差し出すと、和一が笑って言った。

「いいんだよ。それは君のものだ。もとはと言えば巖のものだからね。卒業式の日巖からもらった腕時計なんだ」

「だったら尚更受けとるわけにはいきません」

華は腕時計を前に出す。すると和一は腕時計を受けとり、それを左手の手首に巻きながら言った。

「若い子には古過ぎるか。あんたに持っておいてほしかったんだがね」(= (3))

(4)のようなシテホシカッタは、次に述べるような点で〈過去の希望〉および〈反事実〉の両方に当てはまる特徴をもつ。

シテホシカッタが〈過去の希望〉を表す場合、〈過去において望みが成立・存在した〉ということが表されればよいと、希求の対象となる事態が発話時点までに実現しているか否かということの意味的に捨象される。そのため、希求の対象となる事態が実現しなかった場合もみられることになる。一方、〈反事実〉は、「事態がぎゃくに進行したために、もはや実現することのない」望みであり(奥田1986: 28)、「当該事態が実現しないことが確実と見なされている場合」に使用される過去形の意味である(高梨2010: 187)とされている。このような定義に加え、〈反事実〉を表す過去形は〈残念さ〉といった否定的な感情評価性を伴うということも指摘されている(奥田1992、花蘭1998、宮崎2020)。(4)のように、〈過去の希望〉が発話時点までに実現しなかった事態への希望を表しつつ、〈残念さ〉のような否定的な感情評価性を伴う場合、〈反事実〉との区別が難しくなるのである。

(4)においては、話し手が聞き手に腕時計を持っておくよう働きかけていることから、「聞き手が腕時計を持っておく」という事態に対する望みが過去に成立・存在していることになる。一方で、ここでの望みは、聞き手に断られることによって実現しなかった事態に対するものであるため、シテホシカッタは実現不可能な事態に対する望みを表していると捉えることも可能である。このように、(4)のような過去形は〈過去の希望〉と〈反事実〉どちらの特徴もあわせもつため、先行研究による説明だけではこれら2つの意味のうち、どちらを表しているのかが明らかでないのである。

先行研究において、(4) のようなシテホシカッタは言及されていなかったり（奥田1986）、〈反事実〉を表す場合との区別が判然としないとされたりしており（高梨2010）、その位置づけは不明瞭である。実際、高梨（2010：184）は事態が実現しなかったことを明示する逆接節のシテホシカッタに関して、「あの時は」のような過去の時点を表す成分が共起した場合以外は、〈過去の希望〉を表すか〈反事実〉を表すかが判然としないと述べている²。

以上のことから、(1)、(2) のようなシテホシカッタとともに (4) のようなシテホシカッタが説明可能となるような意味記述が必要であると思われる。そして、シテホシカッタに関してそのような意味記述を行うには、シテホシカッタの意味を〈過去〉というテンスの意味の面と〈反リアル〉というリアリティの面から特徴づける必要があると考えられる。そうすることによって、(4) のようなものがシテホシカッタの表す意味にどう位置づけられるのか、明らかになると考えられるからである。

このような本稿の分類に関しては3節以下で詳しく述べるが、シテホシカッタのテンスの意味、リアリティを考えるには、テンス、リアリティの両側面においてシテホシーシテホシカッタがどのように対立しているかを考えることが必要であるだろう。そこで、2. 2では議論の前提として非動的述語のテンスと、過去形の〈反リアル〉用法に関する先行研究をみていく。

2. 2 非動的述語のテンス対立と〈反リアル〉を表す過去形

本稿の3節以降では、用例分析を通してシテホシーシテホシカッタのテンス対立、リアリティの対立について述べる。ここでは記述に先立って、非動的述語のテンス対立と、〈反リアル〉というムードの意味を表す過去形について確認しておく。

時間的限定性のある動的述語の非過去形—過去形が〈未来—過去〉というテンス対立をなすのに対して、状態形容詞等、時間的限定性のある非動的述語は、基本的には〈現在—過去〉というテンス対立をなす（日本語記述文法研究会2007、工藤2014）。

(5) さっきまでは痛くなかったが、今は痛い。

(6) 昨日は一日中、頭が痛かった。

² 花蘭（1998：88）はシタカッタに関する研究であるが、次のような例について「過去の希望が存在したことを淡々と語るのではなく、そのように事態が実現しなかったことを残念に思っているという点で反事仮想的なニュアンスが生じているのだと思われる」と述べている。ここで挙げられているシタカッタは (4) のようなシテホシカッタに共通するものであると思われるが、後述するように、シテホシカッタが〈過去〉を表す場合にもこのような〈残念さ〉は伴われる。

・オレはな、母ちゃん、事業がやりたかったんだ。事業をすりゃ使い込んだ金なんか、すぐ返せるし、安い給料で一生こきつかわれんでもすむし……（花蘭1998：88）

(7) 昨日からずっと痛い／痛かった。

(5)、(6) における「痛い」「痛かった」は、「痛み」の存在時がそれぞれ〈現在〉〈過去〉であることを表している。(6) のような過去形に関しては、(7) のように過去形が現在とつながる過去を表す場合とは対照的に、過去に成立・存在した「痛み」が発話時現在までに消失していることを含意する。シテホシイーシテホシカッタにみられるテンス対立は、このような非動詞的述語のテンス対立と並行的である。

(8) 「お願いします。わたしと別れてください。離婚してほしいの」(夜の桃 p.339)

(9) 「呼んでくれてありがとう。嬉しいよ」

「今日のまどかを、見て欲しかったの」(億男 p.207)

(8) におけるシテホシイは〈発話時現在〉に存在する望みを表しているのに対し、(9) におけるシテホシカッタは〈過去〉に成立・存在し、発話時現在までに消失した望みを表している。

このように、シテホシイとシテホシカッタは現在—過去というテンス対立をなす。そのようなテンスの意味における対立のほかに、シテホシイーシテホシカッタはリアリティの面においても対立する。

過去形の表すムードの意味は、寺村 (1984)、工藤 (2014)、庵 (2021) 等、多くの先行研究によって論じられている。〈反リアル〉は過去形の表すムードの意味の一種だが、この場合、過去形は、それのとり事態が現実には成立する可能性のない (成立しない) 事態であることを明示する。(10) では、発話時現在において「摘出手術が可能である」という事態が成立不可能であることを、述語の過去形が明示している。

(10) 「しかたがない。本当のことを教えてやる。転移していない状態だったら、摘出手術も可能だったんだが……」(工藤2014: 264)

シテホシカッタにおいても、〈反リアル〉を表すと言えるものがある。前掲の (2) や以下に挙げる (11) のようなシテホシカッタである。

(11) 「努力。そうね、いい言葉だわ。確かに、私には努力する才能はあったかもしれない。でも、それは全て義母キャサリン・パーのおかげ。あの人に会えて私は幸運だった—彼女にはもっと長生きして欲しかった」(PB49_00227)

レアリティは、文が表す事態と現実との一致関係に関するモダリティである。〈リアル〉とは時間のなかに現実化している具体的現象であり、〈ポテンシャル〉とは条件によって現実化する可能性のある事態であり、〈反リアル〉とは条件がなかったために現実化しなかった事態である（工藤 2014: 275）。(8)、(9)に挙げた例では、希求の対象となる事態はいずれもポテンシャルであるが、(11)においては希求の対象となる事態は反リアルである。

このように (11) のようなシテホシカッタは事態が〈反リアル〉であることを表す。ただし、(10) のような平叙文とは異なり、(2)、(11) のような〈反リアル〉を表すシテホシカッタは基本的には話し手の発話時現在の望みを表出するのに用いられる。この場合、シテホシカッタは単に「事態の実現可能性をその消失以前に捉えていれば、望みが生じた」ということの想像（＝反事実仮想）を表しているわけではない。また、このようなシテホシカッタには、〈反リアル〉な事態を表すという点で共通する「もう少し遅ければ、肉は丸焦げになるまで焼けていた。」のような文にはみられない、否定的な感情評価性が認められる。この否定的な感情評価性は事態が〈反リアル〉であることからではなく、話し手が事態成立を志向することから生じるものであると考えられる。このようなことから、本稿では (2)、(11) のようなシテホシカッタを〈希望の叙述〉ではなく〈希望の表出〉を表すものとする。

また、〈反リアル〉を表す平叙文と (2)、(11) のようなシテホシカッタの間には次のような構文論的特徴も指摘できる。(10) のような〈反リアル〉を表す平叙文が「転移していない状態だったら」のような反リアルな条件文をとる一方、〈反リアル〉を表すシテホシカッタに関してはそのような反リアルな条件文との共起はみられないのである。

このような〈反リアル〉を表すシテホシカッタは、〈ポテンシャル〉な事態への希望を表すシテホシイ ((12)) と対立する。(12) のようなシテホシイは、現実成立する可能性のある事態への望みを表す。

(12) 「ただ、受領書はただ受け取りをもらうのを失念しただけという可能性もある。元行員の聞き込みをするとき、誰か代筆をしたものがないか、聞いて欲しい」(銀行狐 p.40)

以上、2節では、シタカッタ・シテホシカッタに関する先行研究の議論において、従来の説明では、発話時点までに実現しなかった事態に対する〈過去の希望〉と〈反事実〉が十分に区別できないことを指摘した。加えて、シテホシイ—シテホシカッタは〈現在〉—〈過去〉というテンス対立をなすこと、また、両者が〈現在の希望の表出〉を表しつつ、〈ポテンシャル〉—〈反リアル〉というレアリティの対立をなすことを確認した。

3 データ・分析結果概観

3節以下では、シテホシイ・シテホシカッタを述語にする文の用例分析を通して、シテホシイ・シテホシカッタのテンス対立およびレアリティにおける対立について記述を行う。まず、本稿の扱うデータについて述べる。

本稿の分析で扱うシテホシイの用例は筆者の手作業によって収集したものに限られるが、シテホシカッタの用例は筆者が手作業で収集したものに加え、現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下「BCCWJ」）から抽出したものである。BCCWJの検索条件は以下の表の通りである。

表 BCCWJの検索条件

前方共起条件	「語彙素」で「て」（キーから2語）
	「語彙素」で「欲しい」（キーから1語）
キー	「語彙素」で「た」（文末から6語以内）
後方共起条件	（なし）
レジスター	出版・書籍（コア・非コア）、図書館・書籍（非コア）
ジャンル	9. 文学（新旧）
期間指定	全期間
前後文脈の語数	500

小説の地の文等、語りのテキストにおいては視点の問題がからむことにより、そのテンス対立のあり方が会話文と異なる。このことから、本稿では描出話法の干渉を防ぐために語りのテキストに現れる用例は扱わず、会話文に現れる用例のみを分析対象とする。

さて、4節でシテホシイ・シテホシカッタの具体的な記述を行うわけだが、2. 1で示した問題点を解決するため、本稿では次のような観点から分析を行う。

前述の通り、(1)、(2)に対する(3)のようなシテホシカッタの位置づけを明らかにするため、テンス的意味の面、レアリティの面からシテホシイ・シテホシカッタの用例を分析する。2節で(3)のようなシテホシカッタは先行研究における記述だと十分に説明できないことを指摘したが、これは(3)のようなシテホシカッタが(2)と同様に、望みの対象となる事態の非実現が発話時現在において捉えられるために生じるものと思われる。以下に、(1)～(3)を再掲する。

- (13)「全て筋書き通りになったわけだ。でも、どうしてそんなことを？ 俺を南極に呼んでなにをさせるつもりだったんだ」「君の手で、篠田英治の隕石を見つけてほしかった」(＝(1))
- (14)「東条首相がピストルで自殺未遂だっていうじゃないの。軍人らしく立派に切腹して死んでほしかったわねえ」(＝(2))
- (15)「いいんだよ。それは君のものだ。もとはと言えば巖のものだからね。卒業式の日巖から

もらった腕時計なんだ」

「だったら尚更受けとるわけにはいきません」

華は腕時計を前に出す。すると和一は腕時計を受けとり、それを左手の手首に巻きながら言った。

「若い子には古過ぎるか。あんたに持っておいてほしかったんだがね」(＝(3))

(14) のようなシテホシカッタにおいては、望みの対象となる事態の実現可能性は、望みの成立時点からみて既に存在しないものである。この場合、話し手は初めから事態が実現不可能であると認識したうえで事態を志向している。したがって、(14) のようなシテホシカッタは、事態が〈反リアル〉である(＝実現可能性がない)という認識を前提とした、発話時現在の望みを表すと言える。実際、(14) において、「軍人らしく立派に切腹して死ぬ」という事態に対する話し手の発話時現在の望みは、その事態が実現可能であった過去の時点においては生じておらず、実現不可能であると認識したのちに成立したものであるだろう。したがって、この場合のシテホシカッタは〈過去〉を表しているとは言えず、〈反リアル〉を表しているとしか言えない。

一方、(15) のようなシテホシカッタにおいては、望みの対象となる事態の実現可能性は、望みの成立時点において存在していると考えられる。この場合、話し手が華に腕時計を受け取るよう働きかけていることから、話し手(＝和一)は「華が腕時計を持っておく」という事態の実現を発話時以前に望んでいることが分かる。このようなことから、望みの成立時点においては話し手は事態を実現可能性のあるものとして捉えていることが分かる。本稿では、(14) と (15) の比較から、両者は望みの成立時点における事態の実現可能性において区別可能であると考ええる。

望みの成立時点における事態の実現可能性の有無は、(14) と (15) のようなシテホシカッタの区別だけでなく、(13) のようなシテホシカッタや、(8)、(12) のようなシテホシイを含めた全てに関わるものである。したがって、望みの成立時における事態の実現可能性にもとづいた分析はシテホシイ・シテホシカッタの全体を捉えることのできる観点であるため、テンス、リアリティに加え、この観点からの記述も行う。

このような観点にもとづいて行った分析を通して、4節では概略、以下の2点を主張する。

①シテホシイ・シテホシカッタが〈希望の叙述〉を表す場合、望みの存在時が〈現在〉なのか〈過去〉なのかという点で対立する。この場合、シテホシイ・シテホシカッタは両者とも、望みの成立時点において実現可能性のある事態への望みを表す。従来、〈反リアル〉を表す場合との区別がいまいであった「あんたに持っておいてほしかったんだがね」のようなシテホシカッタはここに位置づけられる。

②シテホシイ・シテホシカッタが〈希望の表出〉を表す場合、望みの成立時点において望みの対象

となる事態の実現可能性が存在するか否かによって対立する。この場合、シテホシイが望みの成立時点から発話時以降にかけて実現可能性のある事態に対する望みを表し、シテホシカッタは望みの成立時点において既に実現可能性のない事態に対する望みを表す。ここでのシテホシイ・シテホシカッタは、事態が〈ポテンシャル〉あるいは〈反リアル〉であるという話し手の認識を前提とした望みを表す。

4節では以上の①、②について詳しく論じる。

4 分析・考察

4節では、3節で述べたように、望みの成立時点における事態の実現可能性の有無にもとづき、シテホシイ・シテホシカッタの用例分析を行う。それを通して、シテホシイ・シテホシカッタの間にあるテンス対立、リアリティにおける対立の実態を明らかにする。また、それらの対立にモーダルな意味（〈希望の叙述〉か〈希望の表出〉か）がどのように関わるかについて述べる。4. 1ではシテホシイ・シテホシカッタがテンス対立をなす場合、4. 2ではシテホシイ・シテホシカッタがテンス対立をなさない場合について考察する。

4. 1 シテホシイ・シテホシカッタがテンス対立をなす場合

シテホシイ・シテホシカッタを述語にする文には、前掲の (1)、(8)、(9) や次に挙げる例のように、〈希望の叙述〉を表すものがある。

(16) 「どうするんですか」

「どうする、とは？」

「この事件の真相を知った人間は、どういう行動を取るべきなのか、知りたいんですよ。教えて欲しいんです」(重力ピエロ p.431)

(17) 「お願いします。わたしと別れてください。離婚してほしいの」(＝ (8))

(18) 「君は『お金と幸せの答え』を知りたいと言った。僕にお金の使い方を教えて欲しいと。だから僕は君に、十和子や百瀬そして千住に会ってもらおうと思った。彼らの話を聞いてもらいたかった。申し訳ないのだけれど、彼らには君がやってくるであろうことは伝えていた。お金が人をどう変えるかを君に知って欲しかったんだ。(略)」(億男 p.231)

(19) 「全て筋書き通りになったわけだ。でも、どうしてそんなことを？ 俺を南極に呼んでなにをさせるつもりだったんだ」「君の手で、篠田英治の隕石を見つけてはしかった」(＝ (1))

(20) 「呼んでくれてありがとう。嬉しいよ」

「今日のまどかを、見て欲しかったの」(＝ (9))

(16) ～ (20) のシテホシイ・シテホシカッタを述語にする文において、話し手は自らの望みを確認して述べている。いずれの文も、「どうするんですか」「別れてください」という発話や、「聞き手と呼ぶ」といった意志的動作の背後に存在する動機を説明するのに用いられている。このような文の意味・機能は、〈叙述〉か〈質問〉か〈命令〉かといった通達機能上の観点からは一般的な平叙文と共通する。

このタイプのシテホシイ・シテホシカッタを述語にする文は現在や過去に存在する望みの確認を表すため、話し手以外の人物の望みも確認されたものとして表す。(21)、(22) はそれぞれ、話し手によって確認された第三者の望みを表している。また、シテホシイ・シテホシカッタが〈希望の叙述〉を表す場合、上掲の例にみられるノダ等の説明のモダリティのほか、下の例のようにノデハナイカ等の認識的モダリティを表す形式が接続しうる。

(21) 「四連勝、おめでとう。明後日、打ちあわせにきてほしいそうです」(夜の桃 p.110)

(22) 「それで、ニューオリンズのなにが見たいの?」「別に観光名所が見たいわけじゃない。スティーヴンに強く勧められたから同意しただけだよ。それにしても、どうして彼は僕を君に押しつけようとしたんだろう?」(略)「スティーヴンはニューオリンズの街が大好きだから、あなたに楽しんでほしかったんじゃないかしら。自分のせいであなたを引きとめているのなら、なおさらね」(PB39_00637)

こういった〈希望の叙述〉を表すシテホシイ・シテホシカッタの文は、望みが成立した時点において実現可能性のある事態への望みを表す。(16)、(17)、(21) のシテホシイは「聞き手が教える」「聞き手が離婚する」「聞き手が来る」という事態に対する現在の望みを表しているが、この望みが発話場面に成立したものであれ、発話時以前に成立し、現在まで持続しているものであれ、事態は望みの成立時点において実現可能性のあるものである。そして、そのような事態に対する望みが成立以降、発話時現在まで消失せずに存在している。このようにして、この場合のシテホシイは発話時現在の望みを話し手が確認したこととして表す。

また、(18) ～ (20)、(22) のシテホシカッタは「聞き手を知る」「聞き手が見つける」「聞き手が見る」「聞き手が楽しむ」といった事態に対する過去の望みを表しているが、この望みはそれが成立した時点で実現可能性があった事態に対するものである。そのような事態に対する望みは成立以降、発話時現在までに消失している。上掲の例の場合、望みの対象となっている事態が実現したことによる成就によって、望みは消失している。したがって、この場合の望みは過去に成立・存在し、消失するものであり、シテホシカッタはこういった望みを確認したこととして表す。

まとめると、シテホシイ・シテホシカッタを述語にする文は、〈希望の叙述〉を表す場合、基本的には、望みの成立時以降に実現可能性のある事態への望みを表すと言うことができる。シテホシ

イとシテホシカッタは、望みの存在時が〈現在〉か〈過去〉かというテンスの意味において異なる。

〈希望の叙述〉を表すシテホシカッタはこのように〈過去〉というテンスの意味をもつが、(23)～(25)のようなシテホシカッタも(18)～(20)、(22)と同様に〈過去〉というテンスの意味を表すと言えるものである。

(23)「そんなことを怖がる必要はないと、君に言い聞かせていたつもりだった。それまで何年もの間、僕は君を忘れようと努力してきた。だが、よくも悪くも、君を忘れることができなかった。いずれ、君にもわかってもらえんと思ってた。だが、偽の結婚を強要して始まった関係の中で、どうやって君にわかってもらえんだろう？ 君に自分の本能を信じてほしくて、それに反するようなことばかりしていたんだ。君しか見えないと知ってほしかった。しかし結局、僕は君に興味があるふりをしているような態度しかとれなかったんだ。僕がほかの女性に気があると、君が思ってしまうのも当然だ」(PB19_00444)

(24)「ぼくは本当は、先生に学と話して欲しかったんです。でも…できなくて」(LBn9_00208)

(25)「若い子には古過ぎるか。あんたに持っておいてほしかったんだがね」(＝(3))

(23)～(25)において希望の対象となっているのはそれぞれ「聞き手が知る」「聞き手(＝先生)が話す」「聞き手が持っておく」という事態である。これらの事態は、話し手にとって意志的にコントロール可能な事態である。話し手はシテホシカッタの発話以前に、このような事態が実現するよう努めていると思われる。その背後には事態実現に対する話し手の望みが動機として存在すると考えられるが、このことは、そのような望みが過去に存在したことを意味する。この場合、望みが存在した過去の時点においては事態に実現可能性が存在したと言えるが、時間の経過に伴って実現可能性は消失している。

(23)～(25)のシテホシカッタは、そのような事態に対する話し手の過去の望みを表している。したがって、(23)～(25)のシテホシカッタはテンスの意味としての〈過去〉を表している。(18)～(20)、(22)とは、望みの成立時点において実現可能性のあった事態に対する希望を表す点で共通する。

相違点は、(18)～(20)、(22)のシテホシカッタが発話時現在までに実現に至った事態に対する過去の望みを表しているのに対し、(23)～(25)のシテホシカッタが発話時現在までに実現しなかった事態に対する過去の望みを表している点である。希望の対象である事態が実現していないことは(23)、(24)の波線部からも読み取れる。

この場合、シテホシカッタは、望ましい事態が実現しなかったことに対する〈残念さ〉のような否定的な感情評価性を伴っている。この感情評価の意味は後述の〈反リアル〉を表すシテホシカッタにも含まれるものである。

まとめると、事態が実際に発話時現在までに実現するか否かとは無関係に、望みは過去に存在しており、(23)～(25)のシテホシカッタはそのような望みを表すと考えられる。〈残念さ〉のような否定的な感情評価性を伴うという点では〈反リアル〉を表すシテホシカッタと共通するものの、望みの対象となる事態が〈反リアル〉であることを表すために過去形シテホシカッタが使用されているわけではないのである。

なお、(23)～(25)のようなシテホシカッタには、次のような特徴がみられる。人称制限と後続形式に関する特徴である。

当該のシテホシカッタは〈発話時現在に存在する希望の表出〉を表すのではなく、〈過去に存在した希望〉を表すため、〈希望の叙述〉を表す文であるということになる。したがって、(18)～(20)、(22)と同様、話し手以外の人物の望みも表しえるはずだが、本稿における分析では(23)～(25)のように話し手の望みを表す例しかみられなかった。このような人称制限がみられるという点では、希求文と共通する特徴をもつと言える。

また、(23)～(25)のようなシテホシカッタには、(25)や以下に挙げる(26)にみられるようにガヤケド、ノニといった形式が後続しうる。これらが後続することによって、希望の対象となる事態の非実現が明示される。

- (26) 「レイチェルのパーティーから君をさらったとき、本当は、あのままフラットのベッドにきたくてたまらなかった」「私もそうしてほしかったのに」 (PB19_00433)

4. 2 シテホシイ・シテホシカッタがテンス対立をなさない場合

シテホシイ・シテホシカッタを述語にする文には、前掲の(2)、(11)、(12)や次に挙げる例のように、〈希望の表出〉を表すものがある。

- (27) 「まあそうだけど。お母さんが、ちゃんとした私立に入れた方がいいって」

「拓也はうちの子。小学校も地元で充分」

「えー。小学校も？」

「そう。純粹培養はだめだよ。おれは雑草のようにたくましく育てて欲しい」(空中ブランコ p.170)

- (28) 「ただ、受領書はただ受け取りをもらうのを失念しただけという可能性もある。元行員の聞き込みをするとき、誰か代筆をしたものがないか、聞いて欲しい」(= (12))

- (29) 「…すべて、私の責任です」ホーキンズが答えた。いつもの、にやにや笑いを浮かべた顔ではない。「いや、きみのせいではないさ。東京のど真ん中に飛行船でやってきて、銃撃戦をやらかす連中がいるとは、誰も思わないだろう。だが…」ふっとため息を吐く。「きみの本

当の任務、あの鏡を奪うことが、これほど重要であるというのは、教えておいてほしかったな」(LBm9_00045)

- (30) 「宇宙連邦軍司令部がヴァルカン人解放組織に支援を申し出たことは、ご存じですね?」「どうせなら、もっと早く決断して欲しかった」と、カーク。(LBs9_00298)
- (31) 「東条首相がピストルで自殺未遂だっていうじゃないの。軍人らしく立派に切腹して死んでほしかったわねえ」(= (2))
- (32) 「努力。そうね、いい言葉だわ。確かに、私には努力する才能はあったかもしれない。でも、それは全て義母キャサリン・パーのおかげ。あの人に会えて私は幸運だった—彼女にはもっと長生きして欲しかった」(= (11))

(27) ～ (32) のシテホシイ・シテホシカッタを述語にする文において、話し手は発話時現在に存在する自らの望みを表出している。このタイプのシテホシイ・シテホシカッタを述語にする文は発話時現在に存在する望みの表出を表すため、話し手以外の人物の望みは表されない。形式的な面では、〈希望の叙述〉の場合にみられた認識のモダリティを表す形式の後続もみられない。先行研究の指摘通り、基本的には終助詞「な」「ね」等の後接を含め、言い切りの形で現れる。また、発話時現在の望みであることを示す「なら」等が文中に共起しうる。否定の例だが下に挙げておく。

- (33) 「まあ、いそぎんちゃんもカズノコも、おまえは知らないから気持ち悪く思うんだ。しゃべるわけではないし、ちょっと窮屈なだけで、感触としては悪くない」「なら、私には言わないでほしかった。古賀さんが言わなかったら私は平穏に暮らしていたのに」(LBi9_00045)

こういった〈希望の表出〉を表すシテホシイ・シテホシカッタの文は、非過去形と過去形がいずれも話し手の発話時現在の望みを表す。したがって、(16) ～ (26) のシテホシイ・シテホシカッタと同様に、望みの存在時の〈現在〉〈過去〉を表し分けているとは言えない。

〈希望の表出〉を表すシテホシイ・シテホシカッタにおいては、望みが成立した時点における事態の実現可能性の有無という点で違いがみられる。まず、(27)、(28) のシテホシイは「第三者 (= 拓也) が育つ」「聞き手が聞く」という事態に対する現在の望みを表しているが、この望みの対象となる事態は、望みの成立時点において実現可能性のあるものである。なおかつ、その実現可能性は発話時以降にも存在すると話し手が想定しているものである。〈希望の表出〉を表すシテホシイは、このように、望みの成立時点において実現可能性があり、発話時以降もその実現可能性の存在が想定されているような、話し手の発話時現在の望みを表す。

一方、(29) ～ (32) のシテホシカッタは「聞き手が教えておく」「第三者 (= 宇宙連邦軍司令部)

が決断する」「第三者（＝東条首相）が死ぬ」「第三者（＝彼女）が長生きする」といった事態に対する望みを表しているが、この望みはそれが成立した時点において実現可能性が存在しない事態に対するものである。たとえば、(29) では、ある特定の過去の時点において「聞き手が教えておく」という事態が成立せず、その時点を経過したことで実現可能性が消失したため、その後おとずれる望みの成立時点においても事態は実現可能性が存在しない状態にある。このように、(29) におけるシテホシカッタは、望みの成立時点において実現可能性のない事態に対する望みを表している。

本稿では、このようなシテホシカッタは、〈反リアル〉な事態に対する話し手の発話時現在の望みを表すものとする。 (30) ～ (32) においても (29) と同様、〈反リアル〉な事態に対する望みを表している。この場合、話し手は初めから事態が実現不可能であると認識したうえで事態を志向していることになる。したがって、このタイプのシテホシカッタは、そのような〈事態が実現不可能（＝反リアル）である〉という認識を前提とした望みを表している。当該のタイプのシテホシカッタが表すのは、〈反リアル〉と〈希望の表出〉という2つのモーダルな意味の複合である。

前述の通り、シテホシイが表す〈希望の表出〉は、実現可能性のある事態への発話時現在の望みの表出である。この場合、話し手は事態に実現可能性が存在することを認識したうえで、事態実現を望んでいることになる。したがって、このタイプのシテホシイは、〈事態が実現可能（＝ポテンシャル）である〉という認識を前提とした望みを表す。当該のタイプのシテホシイが表すのは、〈ポテンシャル〉と〈希望の表出〉という2つのモーダルな意味の複合である。

〈希望の表出〉を表すシテホシカッタに関しては、4. 1に挙げた (23) ～ (25) と同様に、〈残念さ〉というような否定的な感情評価性を伴っている。ただし、後述するように、二人称の意志的な事態をとっている場合 ((29)) は〈残念さ〉よりも、聞き手への〈非難〉のニュアンスがより強く出るように思われる。

まとめると、シテホシイ・シテホシカッタを述語にする文が〈希望の表出〉を表す場合においては、〈希望の叙述〉を表す場合にみられたテンス対立はみられない。この場合、シテホシイーシテホシカッタはポテンシャルー反リアルというリアリティの面での対立をなす。

なお、構文論的特徴として、〈希望の表出〉を表すシテホシカッタには、以下に挙げる例のように、過去時を指す時間表現（波線部）が共起するということが挙げられる。こういった時間表現は、(36)、(37) のような〈希望の叙述〉を表すシテホシカッタと共起する時間表現（太線部）とは異なり、〈望みの存在時〉ではなく〈事態の成立時〉を指している。〈希望の表出〉を表すシテホシカッタにおいては、〈望みの存在時〉に関わる時間副詞は共起しないように思われる。

- (34) 「あなたにそのリモコンを渡したことで、もはやベッドが監禁場所にはならないことがはっきりしたでしょう」「たしかに」「そういったことは、私に指摘される前に気づいてほしかったです」(LBm9_00271)

(35) 「電卓のせい？ まさかの責任転嫁」

「ここの五番の点数、一二点なのに、二一って入れたんです」

「あら、すぐに言いなさいよ。ホント、小西先生ったら粗探しばかりするんだから」

「書く前に自分で気付いてほしかったんですけどね」(高校入試 p.191)

(36) 「さわらないで」その声はか細い。ネイサンは眉をあげた。「さわらないで？ さっきは死ぬほどさわってほしかったくせに。(略)」(PB39_00483)

(37) 「ジェイ君、本当はずっと誰かに聞いてほしかったんでしょ？ だけど町の人たちはお父さんの話を知ってるし、話すと嫌がるから、それであたしに喋ったんじゃないの？」(PB49_00371)

さらに、通達機能上の観点からは次のようなことが指摘できる。シテホシイは二人称の意志的な事態をとる場合に、会話文中で依頼文相当の機能を果たすことが知られている(由井1995、日本語記述文法研究会2003)。(28) や以下に挙げる (38) のようなものである。

(38) 「新谷が姿を現したら、連絡してほしい。いずれは出て来るはずだ、あんたらの手にかかっていなければね」(百舌の叫ぶ夜 p.155)

(39) 「ただ、受領書はただ受け取りをもらうのを失念しただけという可能性もある。元行員の聞き込みをするとき、誰か代筆をしたものがないか、聞いて欲しい」(= (28))

〈希望の表出〉を表すシテホシカッタが二人称の意志的な事態をとる場合は、話し手にとって望ましい動作を実行しなかった聞き手に対する〈非難〉になっている場合が多い。

(40) 「母さんは彼を弁護するつもり？」「きちんと打ち明けてほしかったわね、キャリン。彼と一緒に過ごしたのは一夜きりだなんて、どうしてそんな嘘をついたの？」(PB29_00641)

(41) 「鮎を獲って生計をたててる人たちを、ほくは何十人も知ってますけど、鮎を手づかみに出来る人なんて一人もいませんよ」「ところがおるんじゃ。愛媛県南宇和郡城辺町北裡ちゅうところに暮らしちよる虫も殺せんような女じゃ」「何か魔法でも使うんでしょうか」「魔法？」「その瞬間、鵜に化ける、とか…」「鵜か…。鶴と言うてほしかったのお」(LBh9_00163)

シテホシカッタがこうした〈非難〉に用いられるのと同様、話し手にとって望ましい動作を聞き手が行わなかったという場面においては、(42) のようにシテホシイも〈非難〉のニュアンスを帯びる。

- (42) ——そんな言いかたは、心外だな。僕は、君の身体を思ってそうしたんだよ。
——それはありがたいけど、ひと言訊いてくれるか、トイレから出てくるのを待っていてくれたらよかったのに。
——駆け込むようにトイレに行った君の行為は、十分に誤解を招くものだよ。
——だけど、あなたが勘違いしたのは事実でしょう？ 私は、ひと言もホットなんて口にしてないんだから。
——僕の勘違い？ せめて、気遣いと言ってほしいな。(君が悪い p.253)

5 まとめ

本稿では、用例分析を通して、シテホシイ・シテホシカッタにみられるテンス対立およびリアリティにおける対立について明らかにした。先行研究における扱いが問題であった(3)のようなシテホシカッタを意味体系全体の中に位置づけるために、シテホシイ・シテホシカッタをテンス的意味の側面、リアリティの側面、さらに、望みの成立時点における事態の実現可能性の有無という側面から分析した。その結果、次のようなことが明らかとなった。

シテホシイ・シテホシカッタが〈希望の叙述〉を表す場合、望みの存在時が〈現在〉なのか〈過去〉なのかという点で対立する。この場合、シテホシイ・シテホシカッタは両者とも、望みの成立時点において実現可能性のある事態への望みを表す。従来、〈反リアル〉を表す場合との区別がいまいであった「あんたに持っておいてほしかったんだがね」のようなシテホシカッタはここに位置づけられる。このようなシテホシカッタは、望みは過去に成立しているものの、望みの成立時点において存在した事態の実現可能性が消失し、結果的に事態が発話時現在において実現可能性のないものとなっているものであった。

一方、シテホシイ・シテホシカッタが〈希望の表出〉を表す場合、両形式は望みの対象となる事態の実現可能性が存在するか否かによって対立する。この場合、シテホシイが望みの成立時点から発話時以降にかけて実現可能性のある事態に対する望みを表し、シテホシカッタは望みの成立時点において既に実現可能性のない事態に対する望みを表す。ここから分かるように、シテホシイ・シテホシカッタは、事態が〈ポテンシャル〉あるいは〈反リアル〉であるという話し手の認識を前提とした望みを表す。この場合のシテホシイ・シテホシカッタは、事態が〈ポテンシャル〉なのか〈反リアル〉なのかという点で対立するのである。なお、(3)のようなシテホシカッタとは、望みが成立した時点における事態の実現可能性の有無の点から区別が可能である。

本稿では、会話文中に現れるシテホシイ・シテホシカッタのテンス対立、リアリティの対立の実態について、用例調査を通し、以上のことが分かった。調査結果からは、テンス対立は〈希望の叙述〉を表す場合にみられ、リアリティの対立は〈希望の表出〉を表す場合にみられることが分かる。シテホシイ・シテホシカッタにおいて、テンス、リアリティ、〈希求の叙述〉⇔〈希求の表出〉と

いうモードは相互に関係づけられているのである。

今後の課題としては次のようなことが挙げられる。

シテホシイに関する先行研究では、〈無意志的事態実現の希望〉((43))、〈他者行為実現の希望〉((45))、〈依頼〉((47))の3つの用法があるとされる(高梨2020)。このうち、〈無意志的事態実現の希望〉と〈他者行為実現の希望〉に関しては、シテホシカッタにもそのまま対応する(それぞれ(44)と(46))。また、〈依頼〉用法に関しても、それのとり事態が二人称の意志的な事態であるという点からみれば対応するシテホシカッタがみられる((48))。

(43)「それで佐世保さんは救われているんですか？」

「そうであって欲しいが……佐世保さんの不幸は、直面している悲劇を乗り越えたいというタイプで、自分の価値を見つけないというものではないからな。生の謳歌などと悠長なことで改善できない状態だ。(略)」(螢 p.116)

(44) 薄手のリンネルの白襯衣に黒の洋袴という飾り気のない軽装の若様は、「そうですか。そんなに似ておりましたか」と照れくさそうに笑って金ぶちの眼鏡をはずした。はずすと叔父にいつそう似てくる。「僕としては、顔よりも商売のうまいところが似てほしかったのですねえ。(略)」(LBt9_00005)

(45)「ある人がいるんですけど、その人を自分のほうに向かせたいって言うか、好きになってほしいと言うか、いや、別に好きになってくれなくてもいいんですけど、もっと私のこと気にしてほしいんです」(強運の持ち主 p.79)

(46)「クレアは腹立たないの！ あんただって拳銃娘なんて言われたのよ、平気なの？」「ワタクシは全然平気ですわ。どうせなら二挺拳銃娘くらい言ってほしかったですわ。せっかく体力をけずってまで撃ちましたのに」(PB19_00221)

(47)「きみに訊くよ。よく考えたあとでかまわないから、自分で答えてほしい。ここのイルカたちに対して、きみがいちばん望むことは、何だね？」(青のフェルマータ p.41)

(48) ジョーカーが、ドアの前に立つ。慎重にノブに手をかける。そのとき、ジョーカーはドアの外に、爆発するような殺気を感じた。ジョーカーがドアの前からとびのくのと、ドアに十文字の亀裂が走るのが、同時だった。くずれ落ちたドアの残骸をふみこえて、背の高い女性—シャクティが入ってきた。足首につけている鈴が、シャランと鳴る。「こんばんは。」シャクティがほほえんだ。能面のような笑顔だ。「礼儀正しいあいさつですが、ドアをあけて室内に入るという最低限のマナーは、守ってほしかったですね。」(LBs9_00288)

これら3用法のうち、〈無意志的事態実現の希望〉と〈他者行為実現の希望〉はシテホシイ以外にもスルトイイ、スレバイイといった評価を表すモダリティ形式や、否定疑問文等が表しうる。本稿

における分析ではこのような用法をめぐって、動作主体の人称、事態の意志性といった観点から分析を行うことはできなかったが、今後は他の希求文との比較を前提として、用法別にシテホシイとシテホシカッタを整理する必要がある。

参考文献

- 庵功雄（2021）「現代日本語のムードを表す形式についての一考察」庵功雄・田川拓海『日本語のテンス・アспект研究を問い直す 第2巻 ―「した」「している」の世界』、267-284、ひつじ書房
- 井上優（2014）「タ1」日本語文法学会編『日本語文法事典』、370-372、大修館書店
- 奥田靖雄（1984）「文のこと」『ことばの研究・序説』、227-240、むぎ書房
- 奥田靖雄（1986）「文のさまざま（2） まちのぞみ（上）」『教育国語』85、21-32、むぎ書房
- 奥田靖雄（1992）「動詞論」『奥田靖雄著作集3 言語学編(2)』、5-114、むぎ書房
- 工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アспект論』ひつじ書房
- 高梨信乃（2010）『評価のモダリティー現代日本語における記述的研究一』くろしお出版
- 高梨信乃（2020）「「してほしい」はどのように用いられているか」『関西大学外国語学部紀要』23、43-58、関西大学外国語学部
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会（2007）『現代日本語文法3 アспект・テンス・肯否』くろしお出版
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 花蘭悟（1998）「希望形式の過去―「～したかった」の文について―」『東京外国語大学 日本研究 教育年報（1997年度）』、75-101、東京外国語大学 日本課程
- 福岡健伸（1997）「いわゆる質形容詞の非過去形と過去形について」『筑波日本語研究』2、117-132、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 宮崎和人（2007）「＜まちのぞみ＞と＜発動＞の間」『岡山大学文学部紀要』48、77-89、岡山大学文学部
- 宮崎和人（2020）「第4章 モダリティ」井島正博（編著）『現代語文法概説』、36-54、朝倉書店
- 由井紀久子（1995）「シテクダサイとシテモライタイとシテホシイ―依頼を表す用法―」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（上）』、220-225、くろしお出版